

# 近世後期におけるテクレル・テモラウの 非恩恵用法

山口 響 史

キーワード：近世後期 テクレル テモラウ 非恩恵用法 対人場面

## 1. はじめに一問題の所在一

本稿では、近世後期（宝暦以降）テクレル・テモラウの複文の非恩恵（受け手にとって望ましくない事態を表わす）用法の違いを明らかにすることを目的とする。

テクレルは、近世後期上方語においてテクレルの受益化に伴って複文の非恩恵用法が出現することが指摘されている（山口2022）。

- (1) こんなときに、おれがなんぼあせつてはたらいて見ても、かんじんの代呂物が、このやうに寝てくれてハ、とてもあたまが上らぬ。（滑稽本、諺躰の宿替、27）

一方で、テモラウについても、近世後期上方語におけるテモラウの発達の中で、テモラウの複文の非恩恵用法がみられるようになるとの指摘がある（山口2015）。

- (2) 先度も大事の茶碗をわって、またきょうも鉢をわってじゃ、ソウ片端からわってもろうては、こちの身代は半季もつづかぬ（心学道話、鳩翁道話、238）
- 上記のテクレル・テモラウの複文の非恩恵用法は、前件において受け手への影響をテクレル・テモラウの使用によって表わし、後件で前件で表わされた事態が受け手にとって望ましくない事態（非恩恵）であることを表わすという点で類似した表現であるといえる。

一方で、テクレル文とテモラウ文は、そもそも格体制が異なるが、複文の非恩恵用法では、受け手と与え手が明示されないことも多い。また、両者の格体制が共通している例も近世後期にはみられる。下記の例(3)では、本来受け手がガ格となるテモラウ構文で与え手がガ格をとっており、テモラウ構文の非恩恵用法がテクレル構文と同様の格体制になっている。近世後期における複文の非恩恵用法においては、

テクレル文とテモラウ文が構文的にも類似した様相を示す。

- (3) a. おまへら が ひよろ ／ して もらふと、わたしの身が立ところがない (滑稽本、諺躰の宿替、65)
- b. これ ／、おまへ迄 が そういふて くれてハ、どふもわからんがな。(滑稽本、諺躰の宿替、190)

しかし、異なる形式で表現されるのであれば、二形式間には差異が存すると考えられる。この二形式間の差異については、先行研究で触れられておらず、十全に明らかになっていない。本稿では、このテクレル・テモラウの非恩恵用法の違いについて明らかにする。

## 2. 先行研究—非恩恵用法（複文）の成立—

本節では、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法の歴史について述べた先行研究を参照する。

テクレルの複文の非恩恵用法の歴史については上方語資料を調査した山口(2022)が詳しい。山口(2022)によれば、テクレルは中世前期には用例がみられるとされる。また、中世前期の用例では、現代語の「～てやる」で解釈できるような、与え手を主語として受け手への授与を述べる用法であり、恩恵性については受益・受害を問わず使用されていたとされる(4)。さらに、中世前期のテクレルは上位者の与え手から下位者の受け手への行為を基本としていたこと、依頼の場合には下位者の与え手から上位者の受け手への用法がみられることを指摘する。

- (4) あはれ所や、此処にて待ちつけて斬つてくればや (義経記、山口2022 (21) p.27)

上記の様相は、近世後期にはみられなくなり、現代のような受益を表すテクレルになること、次例のようなテクレルの単文の非恩恵用法や複文の非恩恵用法が成立することを述べる。

- (5) ナア慮外ながら、それを新七めが、使ひ潰すの、身持ちが悪いのと。一門一家、町年寄、庄屋まで触れ歩いて、蔵々に封を付けさせて、阿呆者にしてくれた、忝いことの。(近松、淀鯉出世滝徳、山口2022 (40a) p.37)
- (6) そなたがかねつけした義理を思ひ心には辞ねどもまあ当分とおもふてくれると返つて迷惑じや (洒落本、南遊記、山口2022 (41a) p.38)

(5)では、「忝いことの」とあるように、実際は被害の事態である「阿呆者にすること」をあえて受益のテクレルを用いて表現している。このことから、テクレルの複文の非恩恵用法は、テクレルが受益を基本として表わすようになった後に「実際は被害の事態に対し、あえて受益のテクレルを用いている」(山口2022、37)用法を端緒として成立したとされている。

一方、テモラウの非恩恵用法については、山口(2022)と同じく上方語資料におけるテモラウの機能拡張を論じた山口(2015)が詳しい。山口(2015)によれば、テモラウは中世末期の成立当初は「A'タイプ 主語が事前に事態の参与者に対して働きかけ、事態が生起するもの」(山口2015、6)であったとされる(7)。

(7) だうやら。おてもとがわるい。なおしてもらお。(狂言記、山口2015(14)p.6)

そして、近世前期になるとA'タイプに加え、「B'タイプ 主語は、事前に事態の参与者に対して働きかけず、与え手を起点として生起した事態の影響を受けるもの」(山口2015、6)もみられるようになり(8)、近世後期になると複文の非恩恵用法が出現するとされている(9)。

(8) ア、仰山な。涼みがてらに紙鳶見に出た、太鼓、鉦が入らうとは、朔日早々、  
祝うてもらうて忝い(近松、心中刃は氷の朔日、山口2015(16)p.7)

(9) ソフ大ごへに言てもらふてほどふも御近所の手まへ外聞かた\〃°じやママ  
しづかにして下され(滑稽本、穴さがし、山口2015(28)p.9)

さらに、山口(2015)の記述を補う山口(2017)では、テモラウの複文の非恩恵用法の成立について、基本的に受益を表すテモラウは、B'タイプになると「結果として受け手にとって迷惑であるという事態があり得ることを端緒として」(山口2017、135)成立したと考えることが述べられる。

以上のように、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法は、出自が異なるものであるものの、基本的には受益を表す形式が近世後期頃において被害を表す用法を獲得するという点で共通している。同時期に成立したこれらの用法がどのように異なるのかについて次節では現象面についてみていく。

### 3. 現象面の把握

#### 3.1 概観

まずは、テクレル・テモラウの非恩恵用法について概観する(表1)<sup>(注1)</sup>。調査に際

しては、テクレル・テモラウに前接する動詞の表す事態が受け手にとって望ましくないことを表すものを非恩恵用法とした。この基準によれば、表1の非恩恵用法の中には、複文の用法以外にも単文のもの（禁止用法など）も含まれる。表1に関しては複文以外の用法も含むことに注意したい。また、「その他」には、複文、単文のいずれも存する願望+打消の例、打消+許可の例を含めている。なお、本稿の調査では近世後期（宝暦以降）における当時の口頭語を反映していると考えられる資料を用いた。基本的に会話文の用例を抽出している。詳細は本稿末尾に示す。

表1 近世後期におけるテクレル・テモラウの非恩恵用法概観

		テクレル						テモラウ				
		非恩恵				受益	授与	総計	非恩恵		受益	総計
		複文	単文		その他 願望+打消、 打消+許可				複文	その他 願望+打消、 打消+許可		
			言い切り	禁止								
上方	洒落本	1		14		250	1	266		1	27	28
	噺本			3		53		56	1		20	21
	心学道話	1		2		29		32	1		12	13
	大坂俄	3		4		63	1	71	7		23	30
	滑稽本	24	3	19	3	240	2	291	6		49	55
江戸	洒落本	2	1	6		210		219			15	15
	噺本					109	9	118			31	31
	滑稽本			4	4	169	17	194			53	53
	人情本	4	2	15	2	530	6	559	1	2	86	89

(10) 「複文」の例

- a. 何<sup>なに</sup>いふのじや。此方<sup>このほう</sup>の工面<sup>くめん</sup>に弱<sup>よほ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るのに、そんな陰気<sup>いんき</sup>な事<sup>こと</sup>いふて呉<sup>くれ</sup>ると逆上<sup>のぼ</sup>して来た。(上方、大坂俄、風流俄天狗、77、複文)
- b. モシ茄子<sup>なすひ</sup>一つでも夢<sup>ゆめ</sup>に見<sup>み</sup>てもらふたら、大事<sup>だいじ</sup>の代<sup>しろ</sup>ものに疵<sup>きず</sup>が付。(上方、噺本、時勢話綱目、85お、複文)

(11) 「単文」の例

- a. イヤ是<sup>これ</sup>ハえらい所<sup>ところ</sup>へ入<sup>い</sup>てくれ<sup>くれ</sup>た。己<sup>おれ</sup>ハちつと常<sup>じょう</sup>から眼<sup>まなこ</sup>がわるいよつて、うしろでハ見<sup>み</sup>へぬ (上方、滑稽本、諺臍<sup>せき</sup>の宿替<sup>しやくか</sup>、79、単文・言い切り)
- b. その方が年<sup>とし</sup>を、人がたずぬるとも、必ず<sup>かならず</sup>いうてくれ<sup>くれ</sup>な (上方、心学道話、鳩翁道話、167、単文・禁止)

(12) 「その他」の例

- a. なんにもそうしてくれいでも、ゑいじやないか。(上方、滑稽本、諺躰の宿替、178、その他・打消+許可)
- b. 房「ひどいぞんきだね然卑くして貰ひたくないものだ(江戸、人情本、春色連理の梅、初編巻之一3ウ、その他・願望+打消)

表1から読み取れるのは、下記の点である。それぞれについて詳しくみてみよう。

- (13) a. テクレルの「複文」の用例数がテモラウの「複文」の用例数より上回る。  
b. 「複文」は江戸語よりも上方語に多く分布する。  
c. テクレルは「単文」「禁止」といった非恩恵用法がみられるが、テモラウではみられない。

非恩恵用法の用例数(13a)については、テクレルが上回るものの、テクレル全体の用例数がテモラウに比して多いため、テクレル・テモラウ全体の用例数の反映とみる。但し、テクレル・テモラウの用法全体から非恩恵用法(「複文」)の占める割合をみると、テクレルは約3.9%(上方語)であるのに対し、テモラウは約10.2%(上方語)とテモラウが高い。非恩恵用法の総数でみればテクレルが多いが、全体の用法における使用割合ではテモラウが多いことになる。しかし、テクレルについては、禁止用法を合わせると約9.9%(上方語)となり、テモラウとはほぼ同様の割合になる。後述のように、テクレル・テモラウの非恩恵用法は実質的に動作の抑止の表現として禁止用法に近い意味で働く場合がある。テクレルが禁止用法を持つことは、テクレル・テモラウの非恩恵用法の違いを考えるうえで考慮する必要があるだろう。

上方語に偏ること(13b)はテモラウについて山口(2017)に指摘のあることであるが、テクレルにも同様のことが指摘できる。また、江戸語にみられるテクレル「複文」の例では、受益の意味を残しているとみられる例が多い(6例中5例)。例えば、下記の例では、受け手のために「煩う」ことが困ることを表す。この「煩う」ことは、受け手にとっては「うれしい」ことである事態(人の知らない苦勞を受け手の為をおもって与え手がすること)と連続した事態であるため、受益の意味を残しているように見える。江戸語のテクレルの非恩恵用法(複文)の例は、このような場面での使用が多いため、非恩恵用法の確例とみなすか判断に迷う。

- (14) 勿論平生おれの為をおもつて。人の知らねへくろうをしてくれるのは。深実  
うれしいは山<sup>やま</sup>／＼だが。こんなにわづらつてくれちやあ。実にどうも困りきる

ぜ。(江戸、人情本、仮名文章娘節用、三編上巻5オ)

さらに、テクレル・テモラウのいずれも、全体の用例数は江戸語が多いにもかかわらず、非恩恵用法は上方語に多い。上方語においてテクレルの非恩恵用法が発達しているといえる。

テクレル・テモラウにおける用法の種類の違い(13c)のうち、テモラウに「単文」がみられないことは、テクレル・テモラウの機能によるところが大きいと考える。テモラウは言い切り形(単文)では基本的に受益の解釈となる。これは、そもそも本動詞モラウが元来「乞い求める」意味を持っており(山口2015)、テモラウにおいてもこの特性が引き継がれていたことに由来すると考えられる。受け手の求める事態が非恩恵であるとは考え難いため、テモラウは語彙的に受益の意味を有していると考えれば、言い切り形では非恩恵とはならないことも首肯できるだろう。一方、テモラウの「禁止」がみられないことについては、現代共通語テモラウにおいて禁止形をつくることのできる(例、おもちゃを買ってもらうなよ。)ため、その理由は定かではない。近世後期にもテモラウの禁止用法は可能であったと考えられるが、使用頻度が低かったことのみ現象面としておさえておきたい。今回の調査範囲内の資料には現れなかったと考える。

以上、テクレル・テモラウの非恩恵用法を概観した。テクレル・テモラウの非恩恵用法(複文)はいずれも受益用法に比すれば少なく、上方語に偏る表現であった。一方、両者の比較をすれば、テクレルの非恩恵用法が種類、使用量ともにテモラウの非恩恵用法を上回っていた。では、肝心の複文の用法の違いはどこにあるのだろうか。次節以降、複文の用法の違いを詳しく観察していく。

### 3.2 与え手へ直接伝えるか否か

テクレル・テモラウの非恩恵用法の発話は、受け手が与え手に直接伝えた場合、動作の抑止として解釈されうる。例えば、夜遅く今から訪問したいという相手に「こんな遅くに来 {てくれ/もらっ} たら困るよ。」と伝えれば、動作の抑止の表現として解釈されるのが一般的である。この点をふまえ、近世後期についても、与え手が聞き手となるかどうかをみる(次頁表2)。なお、以下の調査では、表1の「複文」に用例を絞って観察する。前節の調査をふまえると、江戸語の非恩恵用法を含めた考察が有効であると言いがたいが、本節以降の調査結果については表中に示すこ

ととする。

表2 近世後期テクレル・テモラウの非恩恵用法における迷惑の与え手

		テクレル		テモラウ	
		=聞き手	≠聞き手	=聞き手	≠聞き手
上方	洒落本	1			
	噺本			1	
	心学道話	1		1	
	大坂俄	3		7	
	滑稽本	16	8	6	
江戸	洒落本	2			
	人情本	4		1	

表2より、テクレル・テモラウのいずれも「与え手=聞き手」の例が多いことがわかる。(15)は、車に乗せられた客から車の引き手への発話であり、与え手である車の引き手は聞き手となっている。(16)は、家に憑く幽霊からその家を買おうとしている大通人への発話であり、幽霊が自分は仕込み(偽物)ではないと大通人へ伝える場面である。与え手の大通人は聞き手となっている。

(15) これ\／どこ迄のせていくのじや。あぶない\／。そう無三向にのせてくれると、この節に一ぺんでおちそうな。(上方、滑稽本、諺躰の宿替、166)

(16) どふいふ物といふてとつくりと見ておくれ成され。仕込のゆう霊と一口にいふて貰ふては叶ひませぬ。(上方、大坂俄、風流俄天狗、88)

但し、テモラウは、「与え手=聞き手」の例に限られるのに対し、テクレルは「与え手≠聞き手」の例もみられる(17)。(17)のうち、とりわけ、(17c)は、非情物が主語になっており、有情物の与え手が存在していない。与え手のいない場で迷惑の表出を表わす例がテクレルにのみみられる点は注意される。

(17) a. (舞屋の師匠が稽古の娘の祝儀の算用をしている場面)師ハアそりや女才ないでエ舞ても舞へでも今度ハ浦島カ狂乱を教てどつさり取つもりでエ代そしたらモフやめにするやろうか。師ほんにやめてくれたらやつぱり損じやナア(上方、滑稽本、穴さがし、459)

b. (受け手の独り言) 爰な身代が先へつぶれて、後家が残つてくれると、ゑらい持やくじやけれど、後家のつぶれた方ハマしで、身代はいつでもつぶせるテナ。(上方、滑稽本、諺躰の宿替、65)

- c. さう横から風が当つてくれると、からだ**が**ひよ\／して、どふやらこけるやうであぶない（上方、滑稽本、諺躰の宿替、133）

以上のように、テクレル・テモラウの非恩恵用法について、与え手と聞き手の関係みると、テモラウでは、対人場面での使用に限られていたのに対し、テクレルではテモラウのような使用に加え、既に起きた事態に対し、与え手（聞き手）がその場にいらない中で不満を表出する例もみられた。

### 3.3 発話の種類と対人的要素

前節でみた対人場面での使用について、さらに詳しくみてみよう。本節では、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法について、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法を含む発話がどのような事態を表わし、対人的な要素がみられるのかについてみる。調査は前節でみた「与え手＝聞き手」か「与え手≠聞き手」かを前提に、同一発話の中に依頼・禁止を含むか、言い切りで終わるかで分け、さらに対人的な要素である終助詞（・間投助詞）がみられるのかについて分けた。調査の結果、表3の結果が得られた。

表3 近世後期テクレル・テモラウの非恩恵用法における発話の種類と対人的要素

		テクレル							テモラウ					
		与え手＝聞き手				与え手≠聞き手			与え手＝聞き手					
		言い切り		依頼・禁止		言い切り			言い切り		依頼・禁止			
		助詞なし	間投助詞あり	終助詞あり	助詞なし	終助詞あり	助詞なし	間投助詞あり	終助詞あり	助詞なし	間投助詞あり	終助詞あり	助詞なし	終助詞あり
上方	洒落本	1												
	噺本								1					
	心学道話				1				1					
	大坂俄	1		1	1				2		2	3		
	滑稽本	5	1	3	4	3	4	1	3	3		1	2	
江戸	洒落本	1		1										
	噺本													
	滑稽本													
	人情本	1		2		1								1

テクレル、テモラウともに、テクレルは「与え手≠聞き手」の場合にも、対人的な要素である終助詞が現れている。与え手が聞き手になるかに関わらず、聞き手が

存する場面での使用であるため、対人的な要素は一定数用いられている。上方語における「与え手=聞き手」(言い切り)の場合の終助詞は、テクレルで「ぞ」「わい」「がな」「ものか」が1例ずつみられ、テモラウで「でえ」1例「わい(な)」が2例みられた。テクレルにのみみられる「与え手≠聞き手」における終助詞は、「て」2例、「ぞ」1例であった。終助詞の使用においては、テクレル・テモラウいずれも念押しや確認の終助詞を伴っており、大きな差はみられない。

- (18) 「与え手=聞き手、言い切り、終助詞あり」の例(上方、テクレル)
- a. どく性<sup>しやう</sup>な事してくれると、こんどから耳が蝟<sup>かむ</sup>になつて、金<sup>かね</sup>てこつんぼになつてやる<sup>て</sup> ぞ。(上方、滑稽本、諺臍の宿替、63)
  - b. さう走つてくれると、己やあたまがこぼれる ハイ (上方、滑稽本、諺臍の宿替、119)
  - c. そう両方からひつぱつてくれると、股ぐらのかう葉がめくれてきて、そこらちうへひつゝ、きあるく がな。(上方、滑稽本、諺臍の宿替、190)
  - d. 貴様<sup>きさま</sup>が附歩<sup>つゑある</sup>行て呉<sup>ひ</sup>て叶<sup>くれ</sup>ふ ものか。(上方、大坂俄、風流俄天狗、75)
- (19) 「与え手=聞き手、言い切り、終助詞あり」の例(上方、テモラウ)
- a. △そりやしれた事そんな事をたび／＼仕てもろうたら神代ニかゝわる わいナ (上方、大坂俄、風流俄選、卷四8お)
  - b. ヲ、いや／＼、なにおつしやる。あんたになめてもらふたら、お家さんに言わけがふり升ぬけれど、私<sup>わたし</sup>のほしひ物買<sup>かう</sup>ておくれたら、なめさし升 でエ。(上方、滑稽本、諺臍の宿替、86)
- (20) 「与え手≠聞き手、言い切り、終助詞あり」の例(上方、テクレル)
- a. マア地震よりも(不特定の)人がもたれてくれると、すぐにいがミさうじや て。(上方、滑稽本、諺臍の宿替、65)
  - b. ヨウ赤い姫が来たぞ／＼。へこれ／＼<sup>われ</sup>我のやうにいふて姫を見ると、(近づいてくる赤い姫が)無<sup>む</sup>三<sup>さん</sup>向<sup>こう</sup>によだれをたれてくれると、煮<sup>に</sup>革<sup>かわ</sup>の相場<sup>あひだ</sup>がくるふて、よだれの直<sup>なお</sup>うちが下ると、己<sup>おれ</sup>らか身<sup>み</sup>の上<sup>かみ</sup>に拘<sup>か</sup>る ぞ。(上方、滑稽本、諺臍の宿替、19)

一方、「与え手=聞き手」は、「依頼・禁止」と共起する場合があることが特徴的である。テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法によって受害であることを示しつつ、与え手へ行為指示を行っている。このような依頼・禁止<sup>(注3)</sup>と共起する例は、テク

レル・テモラウのいずれにもみられるが、依頼の形式がそれぞれ異なっている。テクレルの複文の非恩恵用法の場合は、依頼と共起する上方語の8例のうち、7例は、(21)のようにテクレルで表現される(残りの1例は連用形命令と共起する)が、テモラウの場合は、上方語の依頼と共起する5例のうち「～て下され」2例、「～ておくれなされ」2例、「～てほしい」1例となっている。テモラウの複文の非恩恵用法が依頼と共起する場合、基本的にはテクレルの敬語形が用いられる(22)。

(21) 「与え手＝聞き手、依頼・禁止」の例(上方、テクレル)

- a. 何ほ<sup>おれ</sup>己<sup>おれ</sup>ハ手が多いといふても、さうして<sup>ぐるり</sup>八方から引ばつててくれと、どつちもこつちも<sup>ゆく</sup>往事がならぬ。まアちよつと放してくれ \ /。(上方、滑稽本、諺躰の宿替、200)
- b. こりや \ /、そう一ぺんにたくつててくれと、此節季一ぺんに糸がきれるハ。もつとのほしてくれ (上方、滑稽本、諺躰の宿替、147)

(22) 「与え手＝聞き手、依頼・禁止」の例(上方、テモラウ)

- a. 四百八十<sup>くろやき</sup>メ目が灸すへたら家主の黒焼<sup>や</sup>が出来るわへ△こつちの方も一<sup>かへ</sup>時<sup>ねんぶ</sup>に返してもらふてハたまらぬやつぱり少<sup>ねんぶ</sup>トツ、年符にでも仕てほしい (上方、大坂俄、風流俄選、第五4お)
- b. ソフ大<sup>おお</sup>ごへに言<sup>いふ</sup>てもらふてハどふも御近所<sup>ごきんじよ</sup>の手まへ外聞<sup>ぐわいぶん</sup>かた \ / じやマアしづかにして下され (滑稽本、穴さがし、447)
- c. モシお家さん、あんたからサウくづれてもらい升と、内証の事が世けんへしれて、わたしの身にかゝり升。サアもし、初手のとふりに、身もちをかたふしておくれなされ。(滑稽本、諺躰の宿替、65)

上記のようにテクレル・テモラウの複文の非恩恵用法においては、依頼と共起する場合に、テクレルの敬語形を用いるかどうかには差異がみられる。それでは、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法の敬語使用、与え手と聞き手の関係は、どのような様相であったのだろうか。次節では、受け手と与え手の関係についてみる。

### 3.4 受け手と与え手の関係

テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法における受け手と与え手の関係について、与え手が受け手にとって上位者か下位者か、敬語使用の有無を観点として調査を行ったところ、以下の結果が得られた(表4)。なお、与え手が上位者か下位者

かについては、山口（2022）に従い、基本的には、一般的な関係性や敬語の使用状況から判断した。店と客の関係は客を上位とし、親族関係については、近世後期の事情を考慮し、年長者を上位、夫婦では夫を上位としている。身分差が読み取れない場合は同位とし、与え手が特定できない場合は「不明」に分類している。敬語使用については、テクレル・テモラウ構文の中で使用される丁寧語と与え手に対する尊敬語を調査対象とした。また、同一発話内に含む敬語を敬語使用として認めている。

表 4 近世後期テクレル・テモラウの非恩恵用法の与え手及び敬語使用

		テクレル				テモラウ			テクレル			テモラウ				
		上位	同位	下位	非情物	不明	上位	同位	下位	丁寧	尊敬	無し	丁寧	丁寧+尊敬	尊敬	無し
上方	洒落本			1								1				
	噺本						1									1
	心学道話			1							1					1
	大坂俄	1		2			2	5		1	2	1	2			4
	滑稽本		17	4	2	1	4	2			24	3	1	1	1	1
江戸	洒落本			2							2					
	人情本	1	2				1			1	3					1

表 4 より、テクレルの与え手は受け手からみて同位～下位の例(23)が多いのに対し、テモラウの場合は同位～上位の例(24)が多いことがわかる。また、テクレルでは非情物が与え手の場合も用いられている (1,17c)。テクレルは与え手が下位者の場合、テモラウは与え手が上位者の場合に使用する傾向が認められる。

(23) (按摩が医者に対して弟子にするよう頼む場面) □ 私<sup>わたし</sup>しはあなたに附<sup>つき</sup>歩<sup>ある</sup>行<sup>ひ</sup>て  
<sup>おほママ</sup>覚<sup>よ</sup>ふと<sup>ぞんじ</sup>存<sup>ま</sup>す。△情<sup>なさ</sup>けな<sup>ひ</sup>。貴<sup>きさま</sup>様が附<sup>つき</sup>歩<sup>ある</sup>行<sup>ひ</sup>て呉<sup>くれ</sup>て叶<sup>かな</sup>ふものか。(上方、大坂俄、風流俄天狗、75、下位)

(24) そしてマア雪<sup>まふ</sup>の中で其<sup>その</sup>よ<sup>よ</sup>ふに舞<sup>ま</sup>でもら<sup>ま</sup>ふてハそ<sup>は</sup>バに<sup>に</sup>いる物<sup>もの</sup>がたま<sup>たま</sup>らぬ雪<sup>ゆき</sup>もふ  
 のハ<sup>は</sup>よ<sup>よ</sup>い<sup>い</sup>がと<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>で来<sup>く</sup>るのハ<sup>は</sup>い<sup>い</sup>かぬ<sup>ぬ</sup>わ<sup>わ</sup>い<sup>い</sup>ナ<sup>な</sup>わた<sup>た</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>なり<sup>り</sup>升<sup>のぼ</sup> (上

方、大坂俄、風流俄選、卷一6お、上位)

また、表4より、テクレルでは丁寧語の使用はみられないのに対し、テモラウでは丁寧語使用がみられる。一方、尊敬語の使用ではあまり差がない。

(25) (夫婦喧嘩の仲裁の場面) 二人かそういふてくれると、おれや去<sup>いぬ</sup>にもいなれず、是見てくれ(上方、滑稽本、諺臍の宿替、185)

(26) a. もし親方、おまへのやうに、そのやうに味噌するやうにしてもらひましてハ、皆<sup>みな</sup>の足が摺<sup>すり</sup>小木<sup>こぎ</sup>になつて、ゑらい歩<sup>ある</sup>行<sup>き</sup>にくうムり升。(上方、滑稽本、諺臍の宿替、126)

b. ア、申<sup>もう</sup>／＼お前様の扇で遣<sup>もち</sup>ツて貫<sup>ぬ</sup>ひましてハ私の方がつまりません此扇をお遣<sup>もち</sup>ひ被<sup>お</sup>下<sup>くだ</sup>ませ(上方、大坂俄、風流俄選、卷四13お)

以上のように、テモラウの複文の非恩恵用法は、テクレルの複文の非恩恵用法に比べ、同位～上位者の与え手(聞き手)への丁寧な物言いの中で使用されやすいといえよう。それでは、ここまでに見た現象面はどのように解釈できるだろうか。次節で現象面の解釈を行う。

#### 4. まとめと現象面の解釈

3節では、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法の類似点、相違点を観察した。本節では、近世後期におけるテクレル・テモラウの複文の非恩恵用法の相違についてまとめ(27)、現象面がどのように解釈できるのかについて理解を深める。

(27) a. テモラウでは、対人場面での使用(動作の抑止)に限られるが、テクレルではテモラウのような対人場面での使用に加え、既に起きた事態に対し不満を表出する例もみられる。

b. テクレルは、依頼と共起する場合にテクレルを用いるが、テモラウではテクレルの敬語形を用いる。

c. テモラウはテクレルに比べると、受け手よりも上位者の与え手(聞き手)に対して用いられやすく、丁寧語を用いることがある。

結論から述べれば、(27)は、テモラウの複文の非恩恵用法がテクレルの複文の非恩恵用法に比して、相対的に待遇的な配慮機能が強かったためみられる現象であると考えられる。

この解釈について、まずは近世後期の授受動詞体系が現代共通語とは異なること

に着目したい。現代共通語ではテクレル・テモラウのいずれも非敬語形であるが、近世後期江戸語では成立初期と目されるテイタダクがみられるものの、上方語においてはみられない（山口2016）。一方で、中世後期には上方語においてテクレルの敬語形テクダサルは成立しており、近世前期には多く用いられていることが確認されている（荻野2006）。近世後期上方語では、テクレルはテクダサルの非敬語形として位置づけられるが、テモラウは非敬語形ではないことになる。実際に、複文の非恩恵用法が依頼と共起する場合、テクレルの場合は非敬語形のテクレルが用いられ、テモラウの場合はテクレルの敬語形が使用されていた（27b）。また、テモラウは上位者に対して丁寧語とともに用いられる傾向があった（27c）。敬語形と非敬語形の観点からみれば、近世後期上方語のテモラウの複文の非恩恵用法が非敬語形であるテクレルの複文の非恩恵用法に比べ待遇的な配慮機能が強かったとみることができるだろう。無論、テモラウ自体が対人的な配慮機能を持っていたとは断言できない。ここでは、テクレルとの関係でみた場合に、相対的に配慮が必要な場合にはテモラウが要求されたとみる。

上記の点をふまえて、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法の対人場面での使用の違いがあること（27a）に目を向けよう。そもそも、テクレル・テモラウの複文の非恩恵用法は、前接動詞の表わす事態の結果が受け手にとって望ましいことではないことを表出する表現であり、動作の抑止の表現ではない。従って、テクレル・テモラウの非恩恵用法は、「与え手＝聞き手」、「与え手≠聞き手」のいずれでも用いられる可能性がある。この点からみれば、禁止用法を持ちつつ、「与え手＝聞き手」、「与え手≠聞き手」のいずれでも用いられるテクレルの複文の非恩恵用法は、用法本来のあり方に応じた用例分布をしているといえる。しかし、近世後期におけるテモラウの複文の非恩恵用法は、原則、「与え手＝聞き手」で用いられる。この用例分布については、テモラウの非恩恵用法に「与え手＝聞き手」の場面で用いられることを促す機能があったとみる。その機能こそが、待遇的な配慮機能であると考えられる。テモラウの複文の非恩恵用法の例が「与え手≠聞き手」の場合にみられなかったことは、直接与え手に非恩恵であることを伝えない場面（配慮の必要がない場面）では、配慮的な機能の強い形式をあえて選択する必要がなかったためであると考える。

以上、近世後期におけるテクレル・テモラウの複文の非恩恵用法の違いについて

述べた。これらの用法については、近代以降も用例がみられるが、近代以降の展開については述べられなかった。今後の課題としたい。

## 注

(注1) 表1におけるテクレルの「授与」の例は、意志・願望表現を伴い、与え手に視点が置かれる用法である。現代語では「てやる」で表わされる場面で使用される例といえる。

・酒の根だやししてくれんと、酒蔵さしておしよするに(上方、滑稽本、諺臍の宿替、67)

(注2) テモラウの非恩恵用法は、近世前期に紀海音浄瑠璃に1例みられる。この例は、聞き手がその場にはない場面での発話であり、「与え手≠聞き手」の例である。近世後期以降の例の傾向とは異なるものであるが、原則として、テモラウの非恩恵用法は「与え手=聞き手」に偏るとみておきたい。

・一もん共も笑ふである其上に娘に迄すねてもらふはぜひがない。(紀海音浄瑠璃、八百やお七、217)

(注3) 同一発話内における禁止との共起例は、テクレルに1例みられる。

・そちが四十になるの、五十になるのと年をいうてくれると、おれはいかう心ほそう思うによって、必ず年をいうてくれな(上方、心学道話、鳩翁道話、167)

## 【使用資料】

●近世前期\*横山正校注『日本古典文学全集45浄瑠璃集』小学館(八百やお七)[18世紀前半か] ●近世後期〈上方〉\*武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』東京堂出版(軽口片頬笑、軽口大黒柱、時勢話綱目、新撰勸進話、臍の宿かえ、落嘶千里藪、嘶の魁二編)[明和7-弘化3] \*国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス江戸時代編I 洒落本』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#share> (Ver.1.0)(大坂・京都20作品)[宝暦7-天保7] \*近代語学会編『近代語研究 第四集』武蔵野書院(穴さがし心の内そと[幕末~明治初期]) \*武藤禎夫編『江戸明治百面相絵本八種』大平書屋[安政頃] \*武藤禎夫校訂解説『諺臍の宿替』太平書屋[幕末~明治初期] \*山本和明(2002)『『風流俄天狗』研究(一)一翻刻と解題』『大阪商業大学商業史博物館紀要』第2号pp.65-111[天保3-12] \*大阪府立中之島図書館所蔵『風流俄選』[弘化5] \*柴田実校訂『東洋文庫154鳩翁道話』平凡社(江戸) \*水野稔校注『日本古典文学大系59黄表紙洒落本集』岩波書店(遊子方言、辰巳之園、軽井茶話道中粹語録、卯地臭意、

通言総籙、傾城買四十八手、青楼昼之世界錦之裏、傾城買二筋道)〔明和7-寛政10〕\*武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』東京堂出版(御伽嘶、仕形嘶、富来話有智、気のくすり、寿、葉羅井、千年草、詞葉の花、無事志有意、塩梅余史、馬鹿大林、福種蒔、落咄臍くり金、東都真衛、無塩諸美味、一雅話三笑、駅路馬士唄二篇、身振嘶寿賀多八景、落咄熟志柿、落咄屠蘇機嫌、落嘶屠蘇喜言、東海道中滑稽譚、はなしの種、新作可楽即考、百面相仕方ばなし、しんさくおとしばなし、落嘶笑種蒔、春色三題嘶初編、梅屋集)〔安永2-元治1〕\*国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅱ人情本』<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#ninjo> (Ver.08)〔文政4-元治1〕\*浅川哲也編『春色恋廻染分解翻刻と総索引』おうふう(春色恋廻染分解)〔万延1〕\*稲垣正幸・山口豊福『柳髪新話浮世床総索引』武蔵野書院、中野三敏・神保五彌・前田愛校注『日本古典文学全集〈47〉洒落本・滑稽本・人情本』小学館(浮世床)〔文化10-11〕\*中野三敏・神保五彌・前田愛校注『新編日本古典文学全集80洒落本・滑稽本・人情本』小学館(酩酊気質)〔文化3〕\*神保五彌校注『新日本古典文学大系86』岩波書店(浮世風呂)〔文化6-10〕\*日本名著全集刊行會編『滑稽本集』(妙竹林話七偏人)〔安政4-文久3〕\*小池藤五郎校訂『花暦八笑人』岩波書店(花暦八笑人)〔文政3-嘉永2〕

### 【引用文献】

- 荻野千砂子(2006)「クダサルの人称制約の成立に関して」『筑紫語学論叢Ⅱ日本語史と方言』pp.256-273 風間書房.
- 山口響史(2015)「補助動詞テモラウの機能拡張」『日本語の研究』11(4) pp.1-17 武蔵野書院.
- 山口響史(2016)「テイタダクの成立と展開」『国語国文』85(7) pp.34-51 臨川書店.
- 山口響史(2017)「近世後期における補助動詞テモラウー上方語・江戸語の対照一」『名古屋大学国語国文学』110 pp.148-133 名古屋大学国語国文学会.
- 山口響史(2022)「テクレルの変化と恩恵性」『国語国文』91(1) pp.18-41 臨川書店.

【付記】本研究はJSPS科研費21K13020の助成を受けたものです。

(やまぐち・きょうじ／大阪大谷大学講師)

受贈誌 (二〇二二年九月～二〇二二年八月)

- 愛知学院大学大学院文学研究科文研会紀要 三三三  
愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化 三六  
愛知学院大学文学部紀要 五一  
愛知県立大学説林 七〇  
愛知大学国文学 六一  
愛文 五五、五六、五七  
青山語文 五二  
跡見学園女子大学文学部紀要 五五、五六  
愛媛国文研究 七一  
愛媛国文と教育 五四  
大阪国際児童文学振興財団研究紀要 三四  
大妻国文 五三  
大妻女子大学草稿・テキスト研究所研究所年報 一四  
大妻比較文化 二三  
岡大國文論稿 四九、五〇  
岡山大学国語研究 三六  
沖縄国際大学日本語日本文学研究 四六  
帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要 八  
香川大学国文研究 四六  
学習院大学国語国文学会誌 六五
- 学習院大学大学院日本語日本文学 一八  
金沢大学国語国文 四七  
かほよとり(武庫川女子大大学院雑誌)臨時号 一七  
岐阜聖徳学園大学国語国文学 四一  
九大日文 三八、三九  
紀要 言語・文学・文化(中央大) 一二九、一三〇  
京都語文 二九  
近代文学研究 三三  
群馬県立女子大学国文学研究 四二  
言語表現研究(兵庫教育大) 三八  
言語文化学研究(大阪府立大) 一七  
皇學館論叢 三一八～三二一  
高知大國文 五二  
國學院雜誌 一二二～一九、一二、一二三～一八  
國學院大學紀要 六〇  
国語学研究(東北大) 六一  
国語国文研究(北海道大) 一五七、一五八  
国語国文薩摩路 六五  
国語国文論集(安田女子大) 五二  
国語と教育(大阪教育大) 四七  
国文学(関西大) 一〇六  
国文学会誌(京都教育大) 四八